

教師のやる気、学生のやる気：京・江戸・博多、そして巴里：14

南野，森
九州大学大学院法学研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7182153>

出版情報：福音宣教. 77 (3), pp.10-11, 2023-03-01. Oriens Institute for Religious
バージョン：
権利関係：





2022年度前期「法学入門」講義のひとつ（2022年4月25日）。コロナ対策で2つの大教室を連結し、例年の2倍の広さのある教室で講義を行っている（そのため教卓の位置が黒板の位置とずれている）。この時期は、200人の学生がほぼ全員出席し、真面目に聴講している。



14 教師のやる気、学生のやる気

大学はそろそろ春休み、もうすぐ2022年度が終わる。今年度の後期、私は法学部1年生向けに「憲法Ⅰ（統治機構論）」という講義を担当しているが、その半分が終わることになる。半分と言ったのは、この講義は来年度の前期にも続くからである。九大法学部では、1年後期から2年前期にかけて、週1回ずつ、憲法Ⅰを講義するのである（民法Ⅰも刑法Ⅰも同様）。そして2年後期になると、今度は週2回ずつ、「憲法Ⅱ（人権論）」や民法Ⅱ、刑法Ⅱが講義される。

それにしても1年生というのは不思議な学年である。私は前期に「法学入門」の講義も担当しているので、4月の入学式直後から、目をキラキラ輝かせた新生が大教室に溢れ、私の話をひと言も聞き漏らすまいと言わんばかりの熱心さで受講してくれるという、実に幸せな空間にいつも身を置かせてもらっている。

ところが、夏休みが明けて10月に彼らと「再会」すると……。1年生の熱量は、ずいぶん減ってしまったように思う。冬休みが明けて1月になると尚更である。

私の講義は、出席もとらず抜き打ち小テストもせず、ひたすら私が喋るのを学生はひたすら聴くだけのスタイルなので、もちろんサボることも寝ることも自由である（べちゃくちゃお喋りをすれば注意をするだろうが）。そういうわけで、サッカー・ワールドカップの試合の翌日などは極端に出席者が減ったりした。

本連載のちょうど1年前の号（2022年3月号）で、私自身が大学生であったとき、憲法学の樋口陽一先生の授業に出たり出なかつたり、出ても居眠りをしたり、という体たらくであったことを書かせていただいたが、まさにいま私が教え

ている学生たちがそんな感じである。私自身は、樋口先生の前期の講義には不熱心であつたけれど、夏休みに先生の書かれたブックレットに出会い、感動し、後期からは真面目に出席するようになった。しかし、いま私の授業をあまり熱心に聴いてくれない1年生たちが、春休みを経て2年生になり、急に私の講義を熱心に聴き始めるようになるなどということは、なかなか期待できそうにない。そもそも樋口先生のような名講義を私ができているという自信はないし、樋口先生のような優れたブックレットを書けるわけでもない。

それでも、休暇明けの新学期は、しかも学年が改まる新年度は、気分一新、生活態度も受講態度も改善されるチャンスではある。4月から、私の講義に出てくれる学生は増えるだろうか。そして出席者の居眠り割合は減るだろうか。

そういえば、ミサにおける司祭のお説教などでも、会衆が熱心に耳を傾ける態度や空気は、司祭の「やる気」を引き出すことになるのではないかと思つたりもする。大学における授業とミサにおける説教を比較したり、大学教員と司祭を比べてたりするのは——あまりにも違いが多すぎて——乱暴ではあろう。しかし、司祭も人の子、会衆が聖堂の後ろにばかり座り、説教をしても無反応、船を漕ぐ者さえちらほら……となると、嬉しい気分にはならないのではあるまいか。いやいやそれこそ下種の勘ぐり、司祭はそんな俗っぽい感情などとうに超越していると怒られるかもしれないが、それでも、次のミサでは少し前の方に座り、お説教は司祭の顔を見ながら熱心に聴いてみようか、と思つたりもする。



みなみの・しげる●九州大学法学部教授。京都市生まれ。洛星中・高等学校、東京大学卒業後、同大学大学院、パリ第10大学大学院を経て、2002年九州大学助教授、14年教授。AKB48の内山奈月との共著で好評を博した『憲法主義』（PHP文庫）ほか著書多数。